

「お前も何か、チカラが使えるようだな。匂いがするぞ。人間にしちや霊力が強い。鬼傑組に殴りこむにはお前のその体と霊力が助けになる。どうだ」

蓮子のチカラ。星読みのチカラ。月と星から時間を正確に把握する能力だ。しかし蓮子は正直これが何かの役に立つとは思えなかった。第一、星と月がなければ役に立たない。さっき飛んでいるとき空も見上げたが、何も見えなかった。地獄だから。でも、これでも何か役に立つのなら、力になるのなら。

蓮子は早鬼の目を見ると、真剣な顔で答えた。

「……わかりました。部下になります。ただし、メリーを、助けるために」

「いいよ、その返事で。条件がハッキリしてる奴はそれを守ってる限り裏

切らねえからな」

そういうと、早鬼は手を伸ばして蓮子の肩を抱いた。ついさつき、あの天国のようなバーでメリーがしていたように。あの光景がなにかものすごく遠い世界になってしまつて、それを認識しようとする^と頭が重い。なん^で、こんなことに。

「さて。じゃあ、部下になる^{って}ことで、準備でもするか」

「え」

そう、つぶやいたと思つたら、早鬼が蓮子をベッドに押し倒していた。赤い目がぎらぎらと蓮子を見ている。なんじゃこりや。

「な、なんですか!？」

「これからお前に妖力を入れる。ニンゲンのままじゃ弱いし、ここじゃエサにしか見られないからな。わたしの眷属けんぞくにしてやるよ」

「は、はいい!？」

早鬼が言ったことをかみ砕けば、彼女のチカラで蓮子を一時的に人間ではなくするということ、すなわち妖怪にするということだろうか。確かに、それなら簡単に妖怪にも襲われない気もしてくる蓮子である。ここままであり得ない事ばかりおこっていて、蓮子はそんな突拍子もない話でもそんなりと受け入れ始められていた。しかし。

「んむ」

「んうっ！」

早鬼がいきなり、口づけをしてきた。————ほんのり獣臭いのは妖怪のおいだからか？ 馬だから？

そんな冷静に考えてる場合か。舌が、舌が！

バーで受けた、メリーのお仕置きキスの舌遣づかいいに勝るとも劣らない早鬼

の口づけ。上顎うわあごを、歯茎をねっとりなぞられて、蓮子の全身が震える。しばらく蓮子を掻かきまわした舌は、唐突に引っこ抜かれた。

「つぶは！」

「っは。おまえ、好い匂いするな。うまい酒飲んでただろ」

「あ、こ、これが：：準備？」

「まさか。これが本番なわけあるかよ」

言うのと、早鬼は蓮子のネクタイに手を伸ばすと、するりとほどいた。そのままブラウスのボタンをはずしていく。外し終えたら今度はストラックスを慣れた手つきで脱がす。早い！

「ち、ちよつと、早鬼さん」

「お前も楽しもうぜ。私からだ火照ほってしょうがないのさ。あいつらに撃

たれたからよ」

「な、何言ってる」

「お前が言ってた、たんしんじゆう、だったか。撃つと痛みを与える銃」
「あ」

言いながら、早鬼が蓮子の胸をはだける。ブラがずるつと上にずらされた。悲鳴をあげようとしたが、驪駒の手が素早く動いて蓮子の口に布切れを突っ込んだ。

「叫ぶな。外に聞こえたら見つかるぞ」

「—————！」

黙った蓮子を見て満足げに微笑むと、早鬼は乳首をさわりと撫でた。蓮子の背筋に粟あわが立つ。

「むーっ！」

「人間の裸はいいな。きれいだ」

「む、むうう!!」

「さっきの話な。あのカワウソ共も銃、持ってただろ」

あのスーツを着たカワウソ人間のことだ——あれが部下とか、やちえさんは可愛い趣味をお持ちだな!

と、乳首をしよりしより撫なでられる激感に布切れ嚙んで悶なえながら、蓮

子の脳みそが現実逃避をする。滅多にない、他人に体を弄いじられる感覚に、蓮子は身もだえた。そんな蓮子の困惑などどこ吹く風で、早鬼はれんこの乳首をくりくり転がしながら得意げに話をつづけた。

「あいつらも霊なんだよ。カワウソのな。さっきも言ったが、霊は弱い。肉なしだからな。そいつらなんか、ちよつと霊力を撃ち込んだだけで、魂が欠けたり、散り散りになって消えるんだ」

「んむううう！」

「ははは！ 感度いいなお前」

説明なんかもう聞いていられない。早鬼が胸を執拗に責めるせいで、アタマがしびれて体が動かさなくなる。

「この人間霊どもはいい道具を覚えてたよ。銃さ。引き金を引きゃ、ちっこい弾が飛んでくんだ」

「んん！ んんん！」

早鬼の話なんかまともに聞いちゃいられない。びくびくとベッドの上で跳ねる体。視界まっしろになってがバチバチ音を立ててる。口に突っ込まれた布を噛み締めて悶える蓮子を赤い目でぎらぎら見降ろしながら、早鬼は手の動きをさらに細やかにしてきた。乳首の脇をするりと撫たかと思えば、乳房に沿って指を滑らし、ふわりと揉みしだくと先端をすりゆすりゆ

擦りあげて……

「そいつを参考にしてな。作ったんだよ。こんなの」

「……っふ、ふうう」

早鬼の指が止まって、自分の腰に手をやった。そこから出してきたのは、旧世紀型の原始的な火薬式拳銃。彼女はそれを片手でもてあそびながら、銃口を蓮子の乳房に突き付けた。

「ひっ！」

ヒヤツとした冷たい感触と銃口に蓮子は震えたが、これは変だとすぐ気が付いた。金属じゃない、これは樹脂のぬくもり。おもちゃだ。

玩具と気がついて緊張が抜けた蓮子を見て、彼女は「人間は頭がいいな」と笑うと、そいつの銃口で蓮子の乳首をつんつんつつき始めた。銃を持っていない手もまた乳首をいじくりだす。

「うむうううっ！」

「人間たちが使ってた本物じゃねえけどな。あいつら、おもちゃって言うてたけど、撃つだけなら、ここじゃこれで十分さ。こいつの弾は妖力だ。

この妖気弾が当たれば、霊体なら相手の魂がはじける。一発で完全にはいかないが、魂がはじけるのさ。へたすりゃ消える」

「あううう！んむう！」

「さて、それが肉持ちに当たればどうなると思う？」

ぴたり、とまた早鬼の指が止まった。涙でにじむ目で、なんとか早鬼を見る。彼女はにこりと笑うと、銃をこちらに向け――

「こんな感じになるんだよ」

ぱんっ

「ふむうううううう！」

乾いた音と同時に、蓮子の視界が真っ白になる。頭が破裂しそうな感覚。ぎしぎしと口の中でかまされた布がきしむ音がする。全身がわななき、手足がバタバタと暴れる。

「魂が弾けたろ。無性に、気持ちよくなるのさ。おまえらの銃と逆だよ」
衝撃が駆け抜けたと思ったら、乳首責めで体に溜められた快感が一気に全身で爆発したのだ。

「むううううう！」

撃たれた額がじんじんと痛みを発しているが、それ以上に、全身に走る快感で体がどうにもならない。おっぱいを弄いじくられているときのぞわぞわが、ずっと撃たれた場所から溢れているような気分になって、蓮子は目を

回した。

そんな蓮子を見て、早鬼が嬉しそうにはしゃいでいる。畜生め。

「あはは。きもちいいだろ。やっぱ肉持ちは丈夫だな。霊体だったら今ので文字通り“逝って”るぜ。私もさつき、あそこから脱出するとき、散々撃たれてな。翼で少しは防いだが、羽を通して翼の骨にも当たったんだ。

震える体で飛ぶのは結構大変だったんだぞ」

息も絶え絶えな蓮子に、得意げに話しかける早鬼が、ハアハアと荒い息を吐いて舌なめずりをしている。

さつきから水をたくさん飲んでいたのはそのせいかな、と合点がいった蓮子だった。早鬼は火照る体ほてを冷やそうとしていたのだ。∴∴妖気弾とか、撃たれて気持ちよくなるとか、どこかの神話の武器か何かだろうか。ただ、早鬼はこんなので撃たれながら、私を抱えて飛んだのか∴∴と、余裕

のない頭で蓮子は思いを巡らせる。

快感はまだ、まるで血液のように蓮子の“弾痕”から流れ出し続けている。快感とともに感じるぐったりとした脱力感。魂がはじける感触というのがこれだろうか。

布の詰まった口を半開きにして涎を垂らして死体になっている蓮子に再び早鬼がのしかかってきた。

「もういいな」

ようやくぼろ布が口から抜き出され、あの獣臭い口がまた蓮子の唇を奪いに来る。もう、されるがままだった。

「んっ」

「……ん、む」

なまぐさい。動物臭い。犬とデーパーキスしたらこんな感じかと思って

しまう。なまなましい動物の匂いのする早鬼とのキス。正直つらい。

そんな蓮子の気持ちを知ってか知らずか、化け馬は尻尾を揺らして嬉しそうに笑っていた。

「ぷっは。やっぱり、お前の口からはいい匂いがする。もう私は限界だ。お前を抱く」

「んぎゅっ!？」

「……私も撃たれて体が火照ってもう無理なんだ。いいよね」

初めての女言葉とともに、早鬼はなまぐさい涎を垂らしながら蓮子の胸に吸い付いた。

「はあ！」

ぬるりと舌が乳首を這い、きゅんきゅんと神経が刺激され、体が跳ねる。さつきと、全然違う体の感覚に、蓮子は目を見開いた。

「は、あはあっ！」

「撃たれると凄いだろ。ちよつとの刺激が何倍にもなるんだよ」

蓮子の胸を早鬼の舌が這いまわる。ねろりと乳首を一回りして、先端をふるふると弾く。跳ねる蓮子の体を追いかけてながら執拗に執拗に。視界がぐるぐる回って、声があふれ出す。2、3度叫んだら、また布切れが口に突っ込まれた。

「やっぱこいつ噛んどけ」

「ぬ、ふうっ！」

再び声が出せなくなって、蓮子は馬みたいにぶふうう、と鼻から息を吹き出してしまう。馬にエロいことされて馬みたいにあえぐとか、何の冗談だろうか。蓮子は必死に何か文句を言おうとするけど、妖力の弾を撃たれてぐずぐずになった脳はまともに思考をしてくれない。暴れて腰が跳ねた

とき、ひゅん、と股間が冷たくなった。ショーツはもうぐしゃぐしゃだ。ああ、濡れちゃってる……

馬はそれを障害としかみなさなかつた。

「べちゃべちゃだな。脱がすぞ」

「むう、うううう！」

「ふ、んっ」

ビイイイッ！

早鬼が引っ張ると、蓮子の下着はあっさりちぎれてしまった。思わず布を噛み締め早鬼を睨みつけるが、彼女は「買ってやるから」といって気にも留めていなかった。

「へっへ」

剥き出しになった蓮子の股間をみて馬鹿みたいに笑って、早鬼が手を伸

ばしてきた。

「んんんん！」

ぐしゃぐしゃと濡れた陰毛を撫なでさする早鬼。自分の指を蓮子の愛液でしっかり濡らした早鬼が、ついに指を入れてきた。

「んぐっ！」

「やさしくやるから」

入口が、ぎゅうと早鬼の指をくわえている。蓮子が必死に指を締め付けて、抵抗する。それをいなして慎重に中を撫でている早鬼。しばし膣内を探った早鬼は、それに気が付き声を上げた。

「うっは。おまえ。処おほこ女だったか」

「ふうふうう！」

「なら一応聞いてやる。メリーってやつを助けたいか。私の部下になる

か？」

「ふうっ、ふううっ!？」

早鬼の指が止まった。これが、準備なのだ。これをしなければ、早鬼の眷属けんぞくになれない。そうしなければ、蓮子はここで生きていけない。メリーを助けられないが、いいかと。

ぽろぽろと涙がこぼれるのがわかる。震える蓮子を、早鬼が見つめている。しかしその顔は真剣だった。笑っていないかった。

メリーを助けるために犯されるのか、地獄で黙って殺されるのか。どっちがいいか。なんて選択肢だ。ちくしょう。

しかし、あまり茹で上がった頭で長い思考はできなかつた。思ったよりあっさり答えは出せた。——友達残して地獄をさまようくらいなら、こんなもの！メリーから口づけはもらったんだ！

蓮子はゆっくり目をつむると、意を決して、うなずいた。

「よし」

了承を受け、早鬼は蓮子の膣に入れた指をゆっくり動かし始める。ずる、ずると中で指が這いまわる感覚。あの銃で撃たれたからなのか、ぞわぞわとした快感だけがあふれて、膣内を擦られても痛みは全くなかった。

蓮子の頭がぼおっとしてくる。からだがふわふわと浮く感覚。まんざらでもなさそうな蓮子の表情を見たのか、早鬼が指の動きを少し早めた。快感がまた強くなる。ふうふうと自分の鼻息だけが蓮子の頭に響いている。

「どうせなら気持ちいいほうがいいだろ」

そう言って早鬼は、丁寧に蓮子の中をほぐしていった。襞に一つ一つ指を絡め、親指でクリを転がし、合間に乳首を丁寧に舐めて。すでに一度達した体は、ふわふわとろけて手足は投げ出されて動かせず。頭を撃ち抜

かれたぐずぐずの死体でいるのが、とても気持ちよかった。じわりじわりとくる波が、少しずつボーダーラインに迫る。それに合わせて、早鬼の指も早さを増していく。心拍が上がってる。全身に汗をかいているのがわかる。死体になってた体が、ビクビクとはね始めた。骨盤が踊り始める。

ほぐれ始めた蓮子を見て、早鬼が上半身のあちこちを舐め始める。にじんだ汗を片っ端からなめ取るように、首筋や脇、腕、鼻の舌をあのかい口で舐めていく。馬のグルーミングのように。

全身から立ち昇り始める早鬼のにおいが、嗅細胞を通して蓮子の脳を犯していく。全身からぞわぞわが襲ってくるような錯覚を覚えたところで、早鬼が親指で陰核をそっと押しつぶした。

「んっ！ぬむううう！」

また、視界が白く染まる。硬くつむった目からボロボロ涙がこぼれた。

口から布切れが抜かれる。早鬼がまた生臭い口づけをしてきた。激しい息遣いでひりつく喉に生ぬるい水を流し込まれる。おいしい。

「はは。好きなお前。おぼこだけどころかなり一人で遊んでるだろ」

にかっ、と笑った早鬼に反論しようとした蓮子だったが、布を突っ込まれて開きっぱなしだったあごはうまく動かなかった。だらしなく口を開けて、はあはあと呼吸する蓮子の前で、早鬼が服を脱ぎ始めた。

（我慢ならんと言った割には、丁寧に手籠めにしてくれて。意外と紳士的なのかしら）

早鬼の態度に恐怖も薄れた。しかしそう蓮子が思えたのは、早鬼の股間の逸物を見るまでだった。

早鬼が巻きスカートをベッドに落とした時、それが現れた。

「ひっ!？」

「ふふ」

シヨーツをパンパンに張りつめさせて、先っちょをへその下に覗かせるアレが。

早鬼がシヨーツを脱ぎ去ると、その怪物は解放される。ぼろおん、と重量感のある動きで。

———なんじゃありゃ。恵方巻かつ！

心の中で蓮子は現実逃避気味に絶叫した。現実感のなさど猛り狂う逸物のビジュアルに卒倒しそうになる。蓮子ぐらいの年齢になれば本物だろうが写真だろうが、男のアレはなんらかの方法で見ているものだ。しかし知識にあったソレとは雰囲気まるで違っていた。

威圧感を放つ頑丈そうな見た目と、そこだけ日サロに通ったような黒々と色素が沈着した砲塔。先端だけが恥ずかしがるようにピンク色でちよっ

と平らで、とろとろと涎を垂れ流していて。おまけに望遠鏡のように弾が付いていて、ぐいぐいと目の前で伸びていく。先端は返しがごりつと立つてて：：人間のとはまるで違うケダモノのちんちん。それを股間でそそり立っていて。

———あ、あんなもの、未経験の自分に入れられるのか！？　そ、それに、めちゃくちゃくさい！　牧場みたいなおいがする！

蓮子は未経験なので実物の臭いを嗅いだことなどないのだが、明らかにおかしいということだけはわかった。

黒い馬は白慢の逸物を凝視しておびえる蓮子を見て、ますます鼻息を荒くすると得意げにのしかかってきた。

「さあいくぞ」

「ああ、そ、それなにつ！」

「知らないわけないだろ」

「そじゃない！ お、おんなのこにそんなおつきいちんこはついてないっ！」

「妖怪に生者の常識が通用するか。女だけどな、あるのよ。でかいの」
「でかすぎ！ は、はいんない！ それぜんぶはいんないっ！」

「加減する」

「どうやって！」

「やさしくいれる」

「いやっ、あ！」

「あ、濡れてなかったな。ちよつと、まってる……入れる準備すつからよ……」

早鬼はそういうと、蓮子の鼻先で、先端から流れ続ける先走りを手のひ

らに掬すくい、茎こすに擦り付けていく。黒々とした恵方巻が、だんだんヌルテカ
の恵方巻に変わっていく。それと同時に、強い匂いが漂ってきた。

「うぐうっ!？」

「へへっ」

なんせこの馬、蓮子の顔の前でぬちゃぬちゃと先走りをペニスに塗りたくってしごくなんてやっているのだ。もともと強烈なニオイが先走りで融けだしてさらに強い匂いを放ってくる。まるで鼻の奥にずん、と重力がかかるようなオスのおい。体は女なのに、オスの塊のような巨大なそれを股間でしごきたてて。そんな滅茶苦茶なビジュアルと臭いでもう卒倒しそうである。

「は、はひいつ、あふっ！」

なのにどうしてか、その強烈な臭いを嗅がされると体の力がぬけ

て、ぐずぐずになってしまふ。ねじ伏せるような強い臭いに支配される。そうこうしている間に、準備の終わったとろとろ恵方巻の先っちよが、蓮子の陰毛をかき分けた。

「はうっ！」

グラグラ熱い杭のような凶器が、ワレメにぴとつとくつついて狙いを定めている。体は反射的に逃げ出そうとするが、準備でとろとろにされた蓮子の体は早鬼のオスに反応してしまっていて、ちんこのにおいにぐずぐずにされて思うように動けず、逆に逸物の口づけを受けて、陰唇がぎゅん、と熱くなる始末。

「ひいっ……！」

自分の体がこれを入れたがってる事実には、顔が青ざめるのがわかる。そんな震える蓮子の鼻先まで、早鬼は紅潮した顔を近づけてきた。生臭い獣

の吐息を吹きかけながら。

「覚悟はできたか」

「はひっ、ひっ、ひいっ！」

「いいこと教えてやる。蓮子」

「あう、あ」

「八千慧にもツイてる」

「!?!」

「あとな、この畜生界の掟は弱肉強食だ。意味は分かるな」

そういつて、べろりと早鬼は舌なめずりをした。今のキーワードたちが
どういう意味を持つのか。ぐるぐると思考が渦を巻いてて何を考えたらい
いのかわからない。しかし、きつと、それは、メリーもこつちと “同じ”
かもしれないということ……!

「メリーが、メリーも！」

八千慧に、犯されているかも！

「欲しいだろ。あの娘が。じゃあ強くなれ。私が手伝ってやる。食われたくなかったら強くなれ。欲しかったら奪い取れ。お前はまだ獲物だ。いいか」

「あ、はひっ」

早鬼は蓮子の返事を聞くと、ぬちゃっ、と先っちょを軽く押し込み、にっこり笑ってトリガーを引く。

「よし。いいこだね。……いくよ」

ず、どん。